

敦煌資料と初期チベット仏教研究

上 山 大 岬

一、敦煌出土のチベット文資料

敦煌莫高窟第十七藏經洞から発現した古写本の中にチベット語、ウイグル語、ウテン語など漢文以外の言語のものが含まれるが、とりわけチベット語写本は漢文に次いで多数である。そのうち、A・スタイン氏が収集したものは、現在、イギリスのインド省図書館に保管されている。J・ラ・ヴァン・サン教授によつて作成され、一九六一年に出版された目録 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library* やは七六五点を数える。フランスのP.

ペリオ氏が取得してパリの国民図書館に蔵されているものは一一一六点で、一九三九年から一九六一年にかけて三冊に分けて、M・ラルー女史により目録 *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale* が発刊された。

チベット語写本に蔵されるものは、筆者の見せてもらひたかぎり一二二点で、その殆どは『無量寿宗要經』のチベット訳写本であった。最近、各国探險隊の蒐集から免れて中国の敦煌県文化館や蘭州図書館に保管するものが、黃文煥「河西吐蕃文書簡述」(『文物』一一号、一九

七八)で発表された。貝葉のもので約一万枚(ほとんど『無量寿宗要經』^(補註))であるという。

敦煌は八世紀初頭より勢力を増してきたチベットの侵攻をうけ、遂に七八六年頃、それに支配されるところとなり、八四八年、張議潮が起つて唐の支配を奪還するまで、吐蕃の領土となっていた。⁽¹⁾この間、從来の漢人社会も継続していくが、チベット人が当然のことながら敦煌に移住し、チベット仏典の書写学習なども行われていた。チベット文写本が多数敦煌に遺っているのはこのよう事情によるものである。写本の形は、貝葉形、折本形、卷子形、冊子形など様々であるが、すべて手で写した手抄本で、時代は七八六一八四八のチベット支配時代が中心である。其後のものもあるが⁽³⁾、それでも敦煌の藏經洞の封鎖される十一世紀はじめまでのものである。

これらの写本は敦煌仏教の研究にとっての資料であることは勿論であるが、いわゆるチベット学、或はチベット仏教学にとっても実に貴重な資料である。

右の資料を産出したチベット支配期は、チベットの歴史ではティイソンデツェン王(七四二~七九六退位)から、ランダルマ王(八四一即位~八四三)までの期間に当り、チベットが仏教をインドや中国から招請し、寺院を建て、僧を養成し、仏典の翻訳とその書写・流布を行つて仏教興隆をはたした、いわゆるチベット仏教前伝時代である。⁽⁴⁾従来、この時代のことは、『アウトンの仏教史』などの「チョージン」(*chos 'byung*)と称する伝世のチベット仏教史書によって知るほしかつた。ところが、敦煌出土の古写本は、それが断片的なもので叙述性に欠けるという点、チベット中央より離れた敦煌の地にのこつたものであるという点、及び全体のどれだけの部分がどのようない意図で残つたのか不明であるという問題はあるにしても、同時代の直接資料であつて、考古学的資料として貴重視される碑文や鐘銘にも匹敵する資料的価値をもつ。しかもきわめて豊富な数量を有する。これらの資料を研究に有効に適用するならば、伝世史書によつてしか垣間見ることのできなかつた八、九世紀のチベット仏教の実況をリアルに把握することにならう。

II. 敦煌資料のチベット仏教研究[1]

おける意義

敦煌出土のチベット資料に対する研究は、はじめは目録作成にあたったM・ラルー女史やF・W・トマス氏らによつて手がけられ、写本の中の貴重な資料が録文・翻訳の形で紹介された。しかし、チベット学からの関心を誘発する」ともなく、しばらくは後続のないままであった。殊に、日本では漢文資料に関心を奪われ、チベット資料の方は最近まで全く無視されていた。それが本格的に注目されるようになったのは、一九五二年、P・ドゥニエヴィル教授がチベット宗論の漢文記録『頓悟大乘正理決』を敦煌資料の中に発見し、*Le concile de Lhasa* の名で発表されてからである。佐藤長博士は『古代チベット史研究』（一九五八）で、右のド氏の成果とJ・バロー氏らが *Dокументs de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet, 1940-1946* を発表した敦煌出土のチベット年代記を資料に加えて研究を行つた。また、藤枝晃博士は、「吐蕃支配期の敦煌」（一九六一）を発表し

たが、この中で氏は漢文資料のみならずF・W・トマス氏の成果などをとり入れ、チベット文資料も加えて、チベット支配下敦煌の実態を明らかにしようとした。東洋文庫で行われているスタイン蒐集チベット文献の同定作業も含めて、その後の内外における敦煌出土のチベット資料への関心の高まりと成果は著しい。

敦煌のチベット文写本の中には、社会経済文書や法律文書、年代記などもあるが、その大部分を占めるものは仏教の經典・論書・註釈書などの写本である。現在に伝承される木版のチベット大藏經の仏典は、永い間に度々の改訂や再編を経たものであるが、なにしろ敦煌出土のものは、八世紀より九世紀にかけて進行した初期チベット仏典翻訳事業その時代のものである。それらはまさしく現在に伝わるものと原資料である。その中には、大藏經の中に同種の仏典があり、文章を比べてみても綴字法の新旧ぐらいであまり差異のないものもあるが、同種のものであつても文章が著しく違つていて異本と認められるもの、現在に全く伝わっていない古逸のものなども含まれてゐる。これらによつて、古逸仏典の蒐集、チベッ

ト仏典の原初形や異本の確認、当時の仏典翻訳の成立事情やその後の伝承過程などを追跡調査することができる。次にいくつかの例をあげよう。

現在チベット大藏經には『般若心經』のチベット訳は大本のもの（北京版チベット大藏經一六〇番）のみで、玄奘訳に合う小本のチベット訳は収録されていない。ところが、敦煌から多數見つかった『般若心經』のチベット訳は殆どが小本の訳である。このことより、當時やはり小本の訳の流行のあつた事実を知ることができた。

また、『金光明經』は、チベット大藏經にはサンスクリットからの訳二本と、漢文からの訳の計三種（北京版チベット大藏經一七四、一七五、一七六番）が入つてゐるが、敦煌写本中に漢文からの訳の異本が更に一本（ペリオ蒐集チベット写本五〇一番）見つかり、かつては少くとも四種の訳があつたことが分つた。

求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅寶經』に円暉なる人物が註釈（漢文）を書いたものがあり、敦煌から見つかった（スタイン蒐集本五六〇七番）。そして、これをチヨードウによる翻訳僧が訳したチベット訳のある」とも見つかる

た（スタイン蒐集チベット写本二一九番）。この二つは従来漢文の大藏經にもチベット大藏經にも全く無かつたものであり、貴重な回収ができた。

そのほか、敦煌の写本によつてはじめて存在を知ることになったものに、チベット文の禪文獻がある。『楞伽師資記』『頓悟真宗要決』など、漢文禪籍からチベット文に訳したもの、禪師の語句を引用しながらチベット文で独自に著述したものなど相当数にのぼる。禪は、伝世史料によれば、宗論に敗退して以来、チベットより排斥追放されたと言われてゐるもので、それがチベットの支配圏である敦煌でチベット系の人々に読まれてゐた事実は大いに研究者の関心を惹くところである。チベット文の禪文獻の中に古逸の禪文獻を回収できるという点、禪のチベット文写本の存在が当時のチベット仏教のどういう事情を物語るのかなどの点から重要な資料的意義をもつものとして、最近、殊に研究対象にされることが多い領域である。

すでにチベット大藏經に入つてゐる文献の成立事情や誤りなども敦煌資料によりはつきりさせることができ

る。チベット大蔵經に収録されている『ウテン國の予言』と題する文献（北京版チベット大蔵經五六九九番）は、ウテナ佛教史を知るための貴重な文献であるが、敦煌からこの文献の写本が何点か見つかって、もともとこの文献は『釈迦牟尼の涅槃の後、勝法はどういう滅するかの予言』と『ウテン國の年代記』との二つの独立した著作が合併して、一つの本になつた経過がはつきりした。⁽¹¹⁾

また『見解の差別』という文献は、チベット大蔵經に入っているが（北京版チベット大蔵經五八四七番）、各版本ともどうしたわけか文に混乱があつて解説しにくい。ところが、敦煌資料の中にはこの本の写本が見つかって（ペリオ蒐集チベット写本八一四番）、これには乱丁がないところから、正しい形に修正することができた。⁽¹²⁾

『金光明經』の一訳本（北京版チベット大蔵經一七六番）は、訳者を記していない。ところが、これと同じ訳本が敦煌資料の中にもみつかり、それには奥書があつてエセイデ・ジナミトラ・ダーラシーラが訳したことを明記しており、不明であった訳者名を補うことができた。⁽¹³⁾

敦煌資料の中に、漢文とチベット文を並記した語彙対

照表のような写本があり、漢文とチベット文の仏典を比較して学んだり、翻訳を行つたりするときのために準備したものであることも明らかになつた。⁽¹⁴⁾

以上例示したようなことは主として文献研究の分野での意義を示すものであるが、初期チベット佛教の史的研究の面で果す役割も大きい。代表的な例は、敦煌出土資料によるチベット宗論の史実実証である。

先にも紹介したP・ドゥミエヴィル教授は、一九五二年、敦煌資料中に『頓悟大乘正理決』と題する漢文文献（ペリオ蒐集本四六四六番）を発見し、これがチベット史書に述べる中国禪僧マハーヤーナ（摩訶衍）とインド僧カラシーラとの宗義論争の漢文記録であることを明らかにした。この事件は伝説臭が強く、従来史実としての信憑性が疑われていたが、敦煌から同時代の記録が見つかることにより一転して史実であることが実証された。後のこの記録のチベット訳も見つかり、それらを加えて検討してみると、宗論の実際は伝世史料の記述とは大分違つていたことが分る。敦煌資料の適用によつて史的経過を検証し、史書伝承の欠落部分を補い修正してゆくことが

可能となつた。⁽¹⁵⁾

初期チベットにおける翻訳語の形成と確立の過程や年代を確認することは、初期チベット佛教史解明の重要なテーマの一つである。チベット大蔵經に収録されている『二巻本訳語訖』（北京版チベット大蔵經五八三三番）にはその間の事情を述べた前文があり、これが研究の根拠にされるが、この文献には敦煌出土写本も存在している。この度、山口瑞鳳博士はその敦煌本（ペリオ蒐集チベット写本八四五番）も参照して、この重要な文献の和訳を試みられた。⁽¹⁶⁾この場合、チベット大蔵經所收の伝世本のみではこの資料にどれだけの信憑性があるのかを確かめることができないが、この文献成立当時の同種の写本が敦煌資料中に見つかったことにより、この文献への信頼度はきわめて高いものとなつた。

三、敦煌資料であることの問題点

前章において、敦煌資料が初期チベット佛教の文献研究の面においても、史的研究の面においても重要な資料的役割を果すものであることを、いくつかの例をあげて

例えれば次のような問題に出会う。先にも述べたように、敦煌写本の中にチベット文の禪写本類が見つかつた。ところが、伝世資料によるかぎり、宗論に敗けた中國禪僧マハーヤーナ和尚はチベットより追放され、禪もそこより払拭された模様である。その筈であるのに、當時、チベット国の中にある敦煌において、チベット人に禪が学習されていった形跡が認められるのをどう理解したらいであらうか。

これに関して、チベット史書はラサを中心とするチベ

ツト中央の事情を伝えるもので、チベット本土より離れている敦煌のこととは必ずしも一致するものではないとみて、ここ敦煌までは禪の禁止が及ばなかつたと推定する解釈が一つ成り立ちはよう。しかし一方で、禪がチベットで禁止されたとするのは、後世のチベット史家の改竄で、敦煌資料のあり方が物語るよう禪はチベット本土でも行われ続けていたとする見方もある。⁽¹⁹⁾もちろん、それ以外の折衷的解釈もありえようが、そのいすれと見きく分かることとなる。問題が重要であるだけに慎重にによって初期チベット仏教の史的解釈や資料論が大きく分かれることとなる。問題が重要であるだけに慎重でなければならぬが、「いろいろの可能性がある」と結んで解明を打ち切つたり、仮定や推定をくり返すのみでは、折角の資料がありながら、あまりにも残念なことである。

そこで具体的な事実の解明にまで研究を進めようとすれば、どうしても敦煌とチベット本土とが、どのように違うかということを問わざるをえないことになるのである。

敦煌は、たしかにチベットの支配下に入つてその国の

一部となつた。従つて宗教・文化・制度等の相当部分においてチベット本土のそれと共通のものをもち、両地域の交流も密接であったと見るべきであろう。チベット大藏經所収の仏典と同じものが敦煌からも発現していくそのことを証している。しかし、すべてにおいて両者が重なり合うものといえば、そうは思われない。漢文資料の方よりの研究成果によれば、敦煌は中国漢文文化圏にありながらも時代によつては中国本土の影響から独立し、かなり異質な展開をしている。チベット資料の側に立つてみた場合も同様で、地理的距離のあることは内容的違ひのあることにも通じると見るのが自然である。しかも、もともと敦煌は漢文系文化の伝統をもつ地であつて、その影響はチベット化してからも残つていたに違ひない。言語が同じであるからといって、それらを直ちにその母国と共通の資料と見做すことは危険である。たとえば、法成(=チャードゥブ)という学僧は、チベット支配下の敦煌において漢文で著作を行つてゐるが、かれがチベット語にも通じ、チベット仏典の翻訳にたずさわつてチベット仏教にも通曉していたところか

ら、その著作にはチベット仏教の影響が見られる。⁽²⁰⁾もし、そのような成立事情に無知で、漢文仏典である故に中國中原の仏教の資料として研究に適用したならば、まことに滑稽な誤りをおかすことになるであろう。同じような例は、チベット資料の場合でもありえよう。しかし、チベット資料に関しては、まだどれがチベット本土系の文献や写本であるのか、どれが敦煌独自の仏教を反映しているものであるのかさえも判別するまでに至つていないのが現状である。その判別が可能にならないかぎり、たとえばチベット文の禪写本の存在理由や成立場所をどう考えるかの問題にしても結局は推定の根拠が定まらず、水かけ論に終始することになるであろう。

その現状を超えて、敦煌資料の性格を明瞭に判別できるようになるために、どのように研究が進められるべきであろうか。

上述してきたように、敦煌出土のチベット資料は、チベット仏教研究にとって貴重な同時代資料であり、それ

によつて史実の検証を行い、古逸仏典を回収するなどが可能である。しかし、研究が更に進み、単なる伝世史料との対比検証にとどまらず、それによつて史的事実の具体的解釈を意図しはじめるとき、我々は、敦煌の資料であるという地域的特殊性も含めて、もつとこの資料の構造や成立環境を知る必要に迫られることになる。それに對して、いま研究の現状はどうであろうか。またどの点に当面の研究目標を定めるべきであろうか。

第一に指摘したいことは、チベット文写本の写本学的研究の必要性である。一つの写本を資料とするとき、その写本が、何時、誰によって、どこで、どのような目的で写されたかが分ることが望ましい。奥書などがあつて確かめ得れば幸いであるが、それは殊にチベット写本の場合は稀有である。結局文面からの判定は難かしい。ちなみに、敦煌の漢文写本に対しては、多数の写本の比較対照からある程度それが可能になつてゐる。筆跡や紙質などの形状を手がかりとして、記年や奥書は無くてもその写本の大体の性格や、時代などを判定することができまるまでに研究が進んでいる。⁽²¹⁾チベット文写本について

は、現在のところ、そうした判別の方法が全くといっていいほど確立できていない。チベット時代は七八六年以後といふ上限があるので、漢文写本の場合ほど時代の幅が広くないが、それでもその間に思想や翻訳・写経のあり方に変化があったと考えられる。もし、個々の写本成立の年代がある程度判別できるならば、チベット期における教学変遷の層位も見定めることができるであろう。

また、ある写本が敦煌で写されたものか、それともチベット本土で写されたものが搬入されたものであるかの区別も知りたいところである。そうした判定の規準をチベット写本の中はどう見出すことができるかは未知であるが、漢文写本が多数の比較対照によって成功したように、チベット文写本をなるべく多く見通してゆくならば、有効な判別の特徴を発見してゆくことが可能ではないであろうか。幸いに、殆どのチベット文写本のマイクロフィルムが将来されており、多数のチベット写本の写真を一處に集めて比較することも可能となつた。このような作業をくり返すうちに、何らかの鍵が見つかってくるものと期待される。それに関して、筆者は、最近、翻

訳者チャードウップのチベット文の筆跡を確認したが、これも判定の一つの手がかりになりえよう。⁽²²⁾ チャードウップの年代が分っているので、写本の成立年代も自ら限定されることとなる。右は筆写人の筆跡より写本判定を試みる例であるが、この方法は更に敷衍できるかもしけない。そのほか、經字法や翻訳語法の違いからの判定も模索すべきであろう。⁽²³⁾

第二に必要なことは、敦煌仏教全像の解明の課題の中で敦煌自体のチベット仏教の実態が明らかになるということである。漢文資料の場合でも当初そうであったが、とかく敦煌資料を中国仏教やチベット仏教解明の為に利用するという形になりがちである。しかしそれに先立ち、まず必要なことは、敦煌自体の仏教というものを明瞭にするということである。このこと自体が研究目的とされるべきことは勿論であるが、資料論の立場から言つても資料の性格や位置を判定し、中国仏教やチベット仏教への資料適用の精度を増す意味において必須の基礎的解説である。

チベット仏教の研究にかかわって明らかにされるべき敦煌仏教は、いわゆる七八六・八四八年のチベット支配期を中心とする時代である。この研究への着手は前出の

藤枝晃博士の「吐蕃支配期の敦煌仏教」によって行わ

れ、当時の敦煌の輪郭や方法がほぼ明らかにされた。また竺沙雅章博士はチベット支配期の敦煌の僧官制度を明らかにされた。⁽²⁴⁾ 筆者も亦、この時期に活躍した学僧曇曠と、漢・蕃の両語を通じて、チベットの翻訳事業に寄与した法成(=チエードゥプ)の業績を敦煌写本より明らかにしたが、これらの研究により、敦煌の漢人僧が、チベットの仏典翻訳や写経事業に従事していたこと、漢文仏教とチベット仏教が相互に学習され、混成の教學も形成されたこと、僧団の支配体制はどうであったかということ、漢文化とチベット文化が言語生活をはじめいろいろの面で入りまじっていたことなどの実態が分つてきた。しかし、これらの研究はどうしても漢文資料を主体とするもので、チベット文資料の方は可能な限り用いようとはしたが、なお利用しきっていない。やはり、この時代の解説には、チベット資料の充分な研究をまたな

ければならない。それが進むならば、敦煌とチベット本土との同異を測定するための根拠となる事実も見つかるのではないかと思われる。

それに関して、最近の山口博士やG・ウライ博士による敦煌出土のチベット文文書の解説にもとづく研究は貴重である。⁽²⁵⁾ これらの研究で、仏教資料の検討のみでは果せない敦煌におけるチベットの行政制度や他地域との交流などの解説が加わり、一層敦煌におけるチベットの位置や特色が明瞭になるものと期待される。

また黄文煥氏が中国に所蔵する敦煌出土のチベット文『無量寿宗要經』の筆写人・校勘人の氏名を全録して發表したこと⁽²⁶⁾ は、敦煌の写経事業の実態を知る上にきわめて有益な資料を加えることになった。なお、壁画や絹絵などの研究⁽²⁷⁾ の寄与するところも忘れられてはならない。

二十世紀のはじめに偶然にも発見された敦煌資料は、主として伝世資料に頼つて來た從来の學問体系を問い合わせることとなつた。今後、初期チベット仏教研究においても、敦煌資料の採用は益々増えてゆくことであろう。小稿はそうした現状の中で、この資料群がどのような意義

をも、多くのような用意をして研究に生かされたのが
かを吟味してみたものである。

こだまくらな。

特集・チベット仏教

- (1) チベット(古漢)や配期の敦煌については、藤枝晃「古漢文配期の敦煌」(『東方學報』年第III回、一九六〇年)、吉川豐「古漢文配時」(『講座・敦煌』2「敦煌の歴史」IV、一九六〇)参照。なお、敦煌のチベットの陥落の年代は、七八九年、七八一年の藤枝説、七八七年のムウツ・ヨガイル説等がある、筆者はこれまで藤枝説に依ったが、この度、吉川氏が右譜文で提示された池田温氏説に改めて、七八六年を盆地陥落とする。これを採る。
- (2) S tib H〇二番に木版字の断簡がある。金が手稿本とは言えなくともなる。しかし、S tib 七六五番に現代の西洋紙の断片がある例のようだ。蒐集文献の中に他處から集めたものが混りこんでいる可能性性のあることも承知しておかなければならぬ。
- (3) 敦煌のチベット支配は、一七八四年で終るが、J. Hackin: *Formulaires Sanskrit-Tibétain du Xe siècle*, 1924, ルーベン | ○中華人民共和国時代に起きた(社會主義化)。また吉川豊氏によれば、敦煌チベット語文庫解題(第三回)第1分冊(一九七七)～第六分冊(一九八一)未完。
- 日本では、一九六八年、筆者が敦煌写本中の『釋迦語疏記』のチベット訳を紹介して以来、小畠宏允、河本克巳、木村隆徳、原田寛ら各氏により、P tib 一六をはじめとするチベット語文庫の蒐集と研究が急速に起きた(社會主義化)。また吉川豊氏によれば、敦煌チベット資料の研究については、小畠宏允、河本克巳、木村隆徳、原田寛ら各氏により、P tib 一六を中心とするチベット語文庫の蒐集と研究が急速に起きた(社會主義化)。また吉川豊氏によれば、敦煌チベット語文庫解題(第三回)第1分冊(一九七七)～第六分冊(一九八一)未完。
- (10) 敦煌出土の禪写本の中の諸研究について、次の論文が進んで行われてゐる。本村隆徳「敦煌チベット語文叢書」(『東京大学文学部文化交流研究施設研究報告』IV、一九八〇) D. Ueyama: *Etudes des manuscrits tibétains de Dunhuang relatifs au bouddhisme de Dhyana*, bilan et perspectives, JA, CCLXIX, 1981. 「講座・敦煌」8「敦煌仏典叢書」2「中西釋迦牟尼佛」の項、一九八〇。P. Demiéville: Appendix sur «DAMODUOLOU», *Peintures monochromes de Dunhuang*, 1978. P. Demiéville: L'introduction au Tibet du bouddhisme Sinié d'après les manuscrits de Touen-houang, *Contributions aux études sur Touen-houang*, 1979.
- (11) 前掲拙稿「法成の研究」111～111頁。
- (12) 摘稿「H yāyaの仏教釋迦牟尼佛」2「仏教新研究」1977、一九八〇。
- (13) 前掲拙稿「法成の研究」111～111頁。
- (14) 摘稿「H yāyaの仏教釋迦牟尼佛」2「仏教新研究」1977、一九八〇。
- (15) 今枝由良氏による P tib 111頁、「經典大藏出釋迦牟尼佛」を記載する法成の正義論のチベット語文庫解題(第三回)第1分冊(一九七七)～第六分冊(一九八一)未完。
- (16) 今枝由良氏による P tib 111頁、「經典大藏出釋迦牟尼佛」を記載する法成の正義論のチベット語文庫解題(第三回)第1分冊(一九七七)～第六分冊(一九八一)未完。
- (17) 摘稿「敦煌出土のチベット語文庫解題」『敦煌』111の二、一九六〇。
- (18) 摘稿「大蕃國大德三藏法師沙門法成の研究」上、『東方學報』京都三八、(一九六七)、一七～一七二頁。
- (19) 前掲拙稿「法成の研究」上、一五七～一六八頁。同「敦煌出土大德三藏法師沙門法成の研究」『木村武長教授古文紀念・遺稿の研究』一九八一。

du Tibet, JA, CCLXIII(1975). など、P tib ハ117種
の写本。

(16) ハマハニ派體よりこしせ P. Demiéville: *Le concile de Lhasa*, 1952. 以後の研究に次のものがある。

G. Tucci: The Debate of bSam yas according to Tibetan Sources, *Minor Buddhist Texts*, part II, 1958., P. Demiéville: Récents travaux sur Touen-houang, *T'oung pao*, vol. 56, 1970., 指稿「墨曇と敦煌の仏教」『東方學報』京都川上、一五九～一七〇頁、一九六四。その他。など、最近刊の論文は、山口瑞鳳「摩訶衍の傳」『講座・敦煌』80、川七九～四〇八頁（一九八〇）がある。

(17) 山口瑞鳳「11巻本訳語研究」『成田山仏教研究所報』IV、一九七九。

(18) 地域差のいじめ命めし、敦煌資料のもの問題性について曾て論じたことがある。指稿「敦煌出土チベット文書の資料性について」『日本西藏学会報』11、一六七頁。

(19) チベット仏教古派（リヒヤ派）の伝承する文献と、敦煌のチベット写本の中にある禪系の文献の記述内容が近似してくることは、敦煌文獻の示すことが特殊なことではなく、チベット本土でも行われたことを物語る証左だ、アティーシャ以後のチベット仏教後伝時代に入り、中

国禪的仏教を批判してインド系仏教の正統性を強調する

ために、史書に禪が追放されたと改竄して記したのではなかかとする推定である。筆者も亦、この見方に賛成を以てゐるのである。

(20) 前掲指稿「法成の研究」参照。

(21) 敦煌写本の形態的判別方法は、藤枝晃博士によく提唱され、確立された。同氏「敦煌写経の字すがた」『釋義』九七（一九六〇）回氏『文字の文化史』（一九七一）などを参考され、確定された。J.P. Drège: Les cahiers de manuscrits de Touen-houang, *Contributions aux études sur Touen-houang*, 1979., Papier de Dun-huang essai d'analyse morphologique des manuscrits chinois datés, *T'oung pao*, vol. 97, 1981 せ、その方法論を承け、更に進むべく、マイクロペーパード計測した紙の厚さのデーターを用いて材料に加えて研究したものである。

(22) S tib 六八六、S tib 六八七の二写本は、同じ筆跡のウヌ体チベット写本で、奥書も「比丘チヨーデウナが造った」とある。他の筆跡との関連から、書写もチヒーデウナ自身のものと推定される。じらじらしたては指稿「古代チベットにおける善惡業報思想流布の一面—チヒーデウナ著の敦煌写本 S tib 六八七をめぐる」『小野勝年博士頌寿記念・東方学論集』（一九八一）で触れた。

(23) チベット語の綴字法の違いや筆写の書体の変遷が分かれ

ば、時代別別の有力な根拠にならうが、まだは、わかれない

せえない。筆者は『楞伽師資記』や『頤捨真宗要決』の

『翻訳名義集』訳語法に合わない漢文からの直訳体を、

訳語法整備以前の古い訳語法と推定し、この遼くに文献

の成立時代判別の一つの手がかりを求めようとした。し

かし、沖本兄弟より厳しい批判を受けた（『講座・敦

煌』8、四一六～四一八頁、注25）。筆者の推論も仮定

の上に推定を重ねたものであるが、沖本氏の推論（筆者には理解できないところが多い）も筆者の提起したこ

とを「全てあやまつてある」と全面否定できるほどの実

証的根拠に基づくわけではなくらしい。現状では「そう考へられない可能性もある」という推論構成上の御指摘

と受けとった。ただ、『頤捨真宗要決』や『金剛般若

とが P tib 一六に同じ筆跡で連写されてゐるが、

両者の翻訳時期に差があることと何ら矛盾するものはない。古い時代にできた文献と、それ以後にできた文献とを、更に後にそれを必要とした人が同一紙に連写するといふは当然ありうることで、写本取扱い上の基本的常識である。なお、沖本氏が論述中に、漢文の対應を主とする敦煌の特殊な事情の中で、訳語法の違いを考慮する必要のあること。また、たとく旧い訳法でも後世まで行われた可能性がありうること、意見には賛成であり、示唆されるといふことである。また、『頤捨真宗要決』の訳が

『楞伽師資記』のそれと同種ではあるが、より整いつゝことは筆者も感じること、考慮に入れるとよい

であろう。

(24) 佐沙雅章「敦煌の僧官制度」『東方学報』京都川上、一九六一。

(25) 前掲指稿「墨曇と敦煌の仏教学」及び「法成の研究」上・下。

(26) 山口瑞鳳「フンチヨン・ガムボ王の十六条法の虚構性と吐蕃の刑法」『隋唐帝国と東アジア世界』、一九七九。同氏「沙州漢人による吐蕃軍事団の成立と mKhar tsan 軍団の位置」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』四、一九八一。同氏「漢人及び通頬人による沙州吐蕃軍団編成の時期」同右誌五、一九八二。など、山口博士も同様 M. Lalou: Revendication des fonctionnaires du Grand Tibet au VIII^e siècle, JA, 1955. せ、チベット支配期の敦煌以外の辺境の支配体制をいかがつか確實な史料紹介であると指摘される。

G. Uray: The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 AD., Prologomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia, 1979., etc.

(27) 黄文煥「河西吐蕃絲織品錄跋」『中国宗教研究』第11集、一九八〇。回氏「河西吐蕃絲織品錄跋并後記」回右誌 1、一九八一。

(28) 例えば、Heather Karmay: *Early Sino-Tibetan Art*,

1975. や、敦煌遺品中に中国風とチベット・インド風の

混成した絵画のあることを論じてゐるが当時の敦煌の仏

教や美術を知る上で貴重な材料提供である。

(補註) 馬世長「关于敦煌藏經洞的几个問題」『文物』一一、
三一～三二頁（一九七八）にも藏經洞発現のチベット文
写本についての報告があり、いよいよその写本の全重量
の推定が試みられてゐる。

（つとやま だいしゅん・竜谷大学教授）